

博士學位論文

論文要旨
および
審査結果の要旨

博甲第11号

2015年3月

目白大学大学院心理学研究科

氏名	西野 明樹
学位の名称	博士（心理学）
学位番号	博甲第11号
学位授与年月日	平成27年3月25日
授与機関	目白大学大学院
学位論文題目	性別違和を有する者の性別移行に関する心理学的研究
論文審査委員	主査 目白大学大学院心理学研究科教授 沢崎 達夫 副査 目白大学大学院心理学研究科教授 渡邊 勉 副査 目白大学大学院心理学研究科教授 小池 眞規子

論文要旨

人々の中には、性自認（gender identity）と一致しない自らの生物学的性（biological sex）（または、身体的性別（physical gender））や二次性徴に、嫌悪感や忌避感（性別違和感（gender dysphoria））を抱く者がいる。彼らの性別違和感を軽減させる有益な手段には性別移行（gender transition）があるが、性別移行に踏み出すまでやその最中には、様々な心理社会的葛藤が体験される。社会的制約や偏見に苦悩する者も少なくない。こうした性別移行にまつわる心理社会的苦悩と心理的成長に関する研究成果をまとめたのが、本論文である。

第1章「文献的検討」で研究背景、第2章「着眼点と目的」で研究目的を述べた後、性別違和を有する方の語りをもとにした4つの質的研究から得た知見を、第3章「FTM/X自認者が語る社会適応と共生」、第4章「F to M/X性別移行の検討」、第5章「M to F/X性別移行の検討」、第6章「未身体的治療期の性別移行におけるカミングアウト機能の検討」にそれぞれまとめている。第7章「質的研究知見の数量的検討」には、これら4つの質的研究をもとに立てた仮説を統計的に検証した量的研究の成果を報告した。最終章にあたる第8章「総括的討論」ではまず、前章までに得られた研究知見を総括し、先行研究動向に照らしながら本論文独自の点を提起した。次に、これらを踏まえて性別違和を有する者の性別移行に対する心理社会的援助の可能性等について討論し、最後に、心理社会的援助の質的向上を見据えた今後の研究課題に言及した。

1. 文献的検討（第1章）

第1章第1節では、歴史的文献や1880年代以降の精神医学史、1960年から1970年代にかけて展開されたセクシャルマイノリティ当事者による社会運動、アメリカ精神医学会が発刊するDSM上の記載に関する変遷、1960年代のブルーボーイ事件を発端とした本邦独自の医療史等を紐解きながら、性別違和を有する者が置かれてきた社会的現実を概説した。第2節では、性別違和を有する者を取り上げた心理学関連領域の論文を、(a)性同一性障害の発生と状態像に関する研究、(b)治療および支援の有用性に関する研究、(c)心理社会的援助の観点から行われている研究という3点から概観した。

これらから、これまで性別違和を有する者に対する専門的援助・支援の主流をなしてきた身体的治療（性ホルモン投与、性別適合手術等）は、性別違和感の軽減には奏功するものの、全般的なメンタルヘルスの回復・向上への寄与は十分でなく、治療後の社会適応にも課題があることが示唆された。また、本邦の性別違和を有する者に関する学術論文は、身体的治療の適用判定や性別違和感の強弱の鑑別に関心を向けたものが大半であり、心理社会的援助のあり方に有意義な知見を投じるような研究成果の蓄積が不可欠と考えられた。

性別違和を有する者を説明する際に頻用される医学用語のひとつに、“gender identity”がある。第3節では医学用語としての gender identity と心理学分野で広く知られている E. Erikson によるアイデンティティ概念の相違を論考した。また、後年の Erikson がより本質的と述べたようなアイデンティティの再構築プロセスを提示している質的研究論文、同性愛当事者のアイデンティティ形成におけるカミングアウトの重要性を指摘する事例研究論文、性別違和を有する者の心性を自我統合の文脈で解釈した展望論文等を引きながら、性別違和を有する者の性別移行を“全人的なアイデンティティの再構築”の観点から捉える意義に言及した。

2. 本論文の着眼点と目的（第2章）

第2章ではまず、国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health：以下、ICF）（World Health Organization, 2001）に照らして、心理社会的視座から性別違和を有する者が抱く生きづらさを模式化した（“健康”に「性自認に沿った well-being」、 “環境因子”に「社会に既存の性別二元論的価値観」等、“個人因子”に「指定された性別に沿った生育歴・学歴・人間関係」等を置き、「当人の性自認に対してその身体に反映されている性別の特徴が不一致であることに由来する生きづらさ」を“機能・形態障害”（以下、身体的障害）、「当人の性自認とは異なる性別を持つ者として他者や社会に見なされることに由来する生きづらさ」を“活動制限”および“参加制約”（以下、社会的障害）として各要素の相互作用を動的に記述）。

本論文の目的 社会的障害への介入という観点から性自認に沿った well-being 実現に貢献し得る心理社会的援助のあり方に知見を得るため、性別違和を有する者から聴取した語りを質的に分析して性別移行過程で体験される心理的变化を描出し、その肯定的側面に寄与する要因を明らかにすることを目的とした。

なお本論文では、各個が有する性自認の多様性や必ずしも医療機関に頼らずに性別移行を果たす者がいる現状を踏まえ、“性別違和を有する者”について、“少なくとも指摘された性別への不適合感に類似するような性別違和を有することで社会適応上の葛藤があると自認しており、自らの本来の生き方を実現するために性自認に関する言語・非言語的カミングアウトをとまなう性別移行を要する者”という操作的定義を設けた。また、本論文を構成する研究で行ったすべての調査は当事者自助団体等を通じて協力者を募り、医療機関を介することは一貫して控えることとした。

3. 質的研究 (第 3, 4, 5, 6 章)

研究 1 (第 3 章) FTM/X 自認者の社会適応状況および、非当事者との間で生じている齟齬や葛藤について探索的知見を得るため、FTM/X 自認者 15 名に対し、“社会適応と共生社会”をテーマとした半構造化面接を行った。

第 3 節では、(a) 当事者性のカミングアウトにまつわる不安、(b) カミングアウトの目的、(c) “埋没 (自らの当事者性をカミングアウトせず、自分の過去や戸籍を隠すことで、あたかも生まれながらの‘男性’であるかのように振る舞って生活すること)”と“適応 (自らの当事者性をカミングアウトしながら周囲の理解を得ることで、自分の希望通りの性別で生活すること)”に関する考え、(d) 性別違和を有さない非当事者との共生に必要なと思うことという、4つの観点に言及する語りを取り上げ、各面接協力者の社会適応と共生のあり様を個別事例としてまとめた。

第 4 節では、先述の 4 観点に言及する 15 名分の語りを類型化することで、面接協力者間の語りの共通項を抽出した。その結果、カミングアウトにまつわる不安は直接的な関係性がある身近な者に対してより強く抱かれること、親へのカミングアウトと友人へのカミングアウトは質的に異なること、FTM/X 自認者は女性として出生した過去から現在へとつながる歴史性を持つ存在を“ありのままの自分”と感じながらも、対他的・対社会的には“男性”として“埋没”することを望んでいること、性別二元論が深く浸透した社会と性別二元論では捉え切れない性別のあり方を持つことで抱かれる心理社会葛藤に苦悩していること等が示唆された。

第 5 節では自認する性別の属性、主とした現在のあり方、主として希望するあり方について、男性への帰属意識を観点に群分けを行い、第 4 節で得た語りの共通項への言及者数を群間比較した。その結果から、大多数が言及する“埋没”志向の背景には、“男性”への帰属感や性別違和の軽減という積極的動機に加え、“男性”として社会的多数派に同化して社会的スティグマを免れたいという消極的動機があることが考察された。

研究 2 (第 4 章) 研究 1 は、その結果に F to M/X 性別移行の時間的プロセス性を加えることに成功していない。研究 2 では、研究 1 で収集した FTM/X 自認者 15 名の語りに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA) を適用し、社会適応に関する動的理論の生成を試みた。その結果、【従来の適応からの前抜け出し期】【望む性での社会適応模索期】【主体的な社会適応再構築期】の 3 期からなる、社会適応再構築プロセスが生成された。3 期のプロセスとともに、性別にまつわる困難の意味合いが変化していくこともわかった。さらに、【主体的な社会適応再構築期】にある FTM/X 自認者は、性別を越えた 1 人の人間として自らの当事者性を引き受けたり性別二元論に規定された社会に対して働きかけたりすることで、性別に関する一般的な一貫性を持たない者達が“ありのままの自分”で生きられるような社会へと変革する志を有していることが見出された。

研究 3 (第 5 章) 一般に、F to M/X 性別移行より M to F/X 性別移行の方が、社会的偏

見に曝されやすい。そこで研究3では、性別違和感を自覚した頃を起点とした M to F/X 性別移行体験を時系列に沿って聴取する半構造化面接を実施し、M to F/X 性別移行に関する動的理論の生成を試みた。

MTF/X 自認者 16 名の語りを M-GTA にて質的に分析した結果、【自問自答】から【苦楽ある私だけの人生】に至るまでの心理的变化を説明する心理社会的アイデンティティ再構築プロセスが生成された。このプロセス理論をもとに考えると、生物学的性によって指定された性別から抜け出していくプロセスは、性別違和を有する者が自らの本来的なかつ根源的存在意義を手にするために必須のプロセスと言える。また、彼らの心理社会的アイデンティティが再構築されていく上で最も大きな原動力となる“艱難から解放された感覚”は、性別違和を有する当人自らが、希望する性別でのあり方で生きていくために他者や社会との相互協調を主体的に試行錯誤していくことでもたらされることが見出された。

研究4 (第6章) 先述の研究3で見出された MTF/X 自認者が苛まれる対他的性別移行の苦悩の1つに、いつまでも“男(性)”として見なされる現実から抜け出せないことがあった。性別違和を有する者が抱く対他的・対社会的葛藤は、外見上の性別移行がもたらされる以前により強いと考えられる。研究4では、性別違和を有する者13名(MTF/X 自認者6名, FTM/X 自認者7名)に対し、身体的治療による外見的变化をとまなわない時期のカミングアウト体験を聴取する半構造化面接を行った。分析には M-GTA を用いた。

その結果、【知ってもらうには言うしかない時期】【必要以上は口にしたくない時期】【対話を通して自分らしさを表現する時期】からなる未身体的治療期のカミングアウト体験プロセスが生成された。また、性別違和を有する者が行うカミングアウトの機能は各期に対応した特徴があり、“生きるためのカミングアウト”、“変化を求めるカミングアウト”、“自己表現としてのカミングアウト”のように、性別違和を有する者とカミングアウト相手との関係性によって異なる意味が付与されていることが見出された。

4. 量的研究 (研究5 (第7章))

研究5では、研究1, 2, 3, 4の結果をもとに、以下3つの仮説を立てた。(仮説1) well-being の伴う性別移行過程ではその人独自の本来的なアイデンティティが再構築される、(仮説2) “男性” / “女性” に対する同一性の感覚ではなく性別を超越した自我アイデンティティの感覚の強さが性自認に沿った社会生活の実現度と深く関係する、(仮説3) 性別移行過程に伴う肯定的な心理的变化は、性別二元論に由来する他者や社会との軋轢や心理社会的葛藤・苦悩から抜け出そうともがき努めることでよりよく導かれる。これらの仮説を検証するため、日本全国の性別違和を有する者に対する自己記入式質問紙調査を行った。

調査の結果、性別違和を有する者 267 名から有効回答が得られた。このデータについて因子分析等を行い、(尺度 a) “多次元自我同一性尺度” (谷, 2001) (性別違和を有する者が回答することを想定して項目を一部改変) をもとにして得た“要性別移行者用多次元自我同一性尺度 (MEIS-TG)” の 4 下位尺度得点 (要性別移行者対自的アイデンティティ得点,

要性別移行者対他的アイデンティティ得点, 要性別移行者心理社会的アイデンティティ得点, 要性別移行者自己斉一性・連続性得点) を性別移行過程におけるアイデンティティ再構築の指標, (尺度 b) 米国で開発された“Posttraumatic Growth Inventory” (Tedeschi & Calhoun, 1996) を西野・沢崎 (2014) が邦訳した 21 項目 (教示文中にある“苦境体験を通して”との記述を, “あなたの社会生活が身体的性別に基づくものから性自認に沿った性別によるものへと移行していく中で”に置き換えた) をもとにして得た“性別移行過程における Posttraumatic Growth 尺度 (性別移行 PTG 尺度)”の 2 下位尺度得点 (自己に対する有力感の獲得得点, 人間らしい生き方と親しみの再認得点) を性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容の指標とした。

これに, (尺度 c) “ある性別への統一性, 一貫性, 持続性の感覚”を測るジェンダー・アイデンティティ尺度 (GIS) (佐々木・尾崎, 2007) (高次下位尺度“現実展望的性同一性”を構成する展望的性同一性得点および社会現実的性同一性得点, 高次下位尺度“一致一貫的性同一性”を構成する自己一貫的性同一性得点および他者一致的性同一性得点の 4 得点を主に使用), (尺度 d) 外見的性別転換度として回答を求めた, ここ 1 週間見知らぬ他者からどのくらい身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなされているかの自己評定 (“0. 身体的性別に即してみなされている状態” — “100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態”), (尺度 e) 性自認に沿った社会生活実現度の指標とした回答を求めた, ここ 1 週間性自認 (必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来的なもの) に沿った社会生活が実現しているかの自己評定 (“0. 全く送っていない状態” — “100. 完全に送れている状態”) を加え, 性別移行 PTG 尺度の自己に対する有力感の獲得得点と人間らしい生き方と親しみの再認得点をそれぞれ目的変数, 4 つの GIS 低次下位尺度得点, 4 つの MEIS-TG 下位尺度得点, “外見的性別転換度”, “性自認に沿った社会生活実現度”を説明変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った。

その結果, 自己に対する有力感の獲得得点を目的変数とした場合の調整済み決定係数は $R^2 = .28$ ($p < .01$) で, 有意な関連が認められたのは, 自己一貫的性同一性得点 ($\beta = -.26$, $p < .01$), 要性別移行者対自的アイデンティティ得点 ($\beta = .39$, $p < .01$), 要性別移行者自己斉一性・連続性得点 ($\beta = -.13$, $p < .05$) の 3 つであった。人間らしい生き方と親しみの再認得点を目的変数とした場合の調整済み決定係数は $R^2 = .24$ ($p < .01$) で, 有意な関連が認められたのは, 展望的性同一性得点 ($\beta = .24$, $p < .01$), 社会現実的性同一性得点 ($\beta = -.18$, $p < .05$), 自己一貫的性同一性得点 ($\beta = -.36$, $p < .01$), 要性別移行者対自的アイデンティティ得点 ($\beta = .22$, $p < .01$), 要性別移行者対他的アイデンティティ得点 ($\beta = .29$, $p < .01$), 要性別移行者自己斉一性・連続性得点 ($\beta = -.25$, $p < .01$) の 5 つであった。

これらの結果から, (a) 過去から現在まで一貫して揺るぎない性自認を保持しているとの自負が心理的成長に負の影響を与えること, (b) 現在から未来に向けて展望が開けていることがエンパワメント (empowerment: 自己の有力化) につながること, (c) 人間らしい生き方と親しみの再認には, 自己内と他者間の両アイデンティティが正の影響を与えること

が明らかとなった。また、性別移行進捗度に関する 2 つの得点（外見的性別転換度、性自認に沿った社会生活実現度）は、性別移行 PTG 尺度の 2 下位尺度得点いずれとも有意な関連を示さなかった。このことから、性別移行過程に伴う肯定的な心理的变化は、性別移行がどの程度進捗しているかという現実的变化から影響を受けない、極めて内的な感覚であることが推測された。

5. 総括的討論（第 8 章）

本論文を構成する 5 つの研究からは、(a) 性別違和感を自覚してから性別移行に歩み出すまで、特に幼少期から思春期にかけては、自らが“男であるか、女であるか”が大きな苦悩と自己嫌悪をもたらすこと、(b) “ありのままの自分”として主体的に生きようとする際、“男性”とも“女性”とも言い切れない自身と社会に既存の性別二元論との齟齬は、内的葛藤として当人の中に内包されていくこと、(c) 性別違和を有する者にとって、性別移行は本来の当人独自の性自認に沿ったあり方を獲得していくための試行錯誤過程として体験されるものであり、そこで行われる他者や社会との相互協調が心理社会的 well-being の感覚を導いていくこと、(d) 心理社会的 well-being の実現過程には、生物学的性（身体的性別）とは異なる性別であることに関する、他者からの承認が不可欠であること、(e) 主体的な社会適応や心理社会的アイデンティティの再構築は、性別にまつわる心理社会的葛藤の解消と同義ではないこと、(f) 決死の覚悟で行う単発的なカミングアウト体験を重ねていくなかで、自らのあり様を表現して伝えていく継続的なカミングアウト（対話）を希望するようになっていくこと、(g) 出生時の生物学的性と反対の性別に限りなく近づくことではなく、性別を超越した自我アイデンティティの獲得によって、性別移行過程に伴う心理的成長がもたされることが明らかとなった。

これらを鑑みると、外見や社会生活などの目に見える具体的変化がともなう“性別移行”が性自認に沿った心理社会的 well-being を実現させるものとなるには、当人が他者や社会の相互協調を主体的に試行錯誤していくことが有益と考えられる。彼らの性別移行に関わることになった援助・支援の提供者に求められるのは、社会に深く浸透している性別二元論に囚われない当人独自のあり方を協働的に模索することを通して、性別を超越した自我アイデンティティの感覚の獲得をエンパワメントすることと言えるだろう。

今後の研究課題として、性別違和を有する者が直面する特有の社会的課題に注目し、性別違和を有する者の生活の場によりコミットした研究知見を得ていくことが挙げられる。具体的には、就職や就業上の困難、在職中の性別移行、戸籍上の婚姻や家族関係を得られないなかでのライフパートナーシップ形成等を取り上げることが意義深いと考える。

付記

研究 5 で行った質問紙調査に際しては、以下のようなセクシャルマイノリティ関連自助団体等から協力を得た。COM らっど（北海道）、スクランブルエッグ（青森県）、岩手レイン

ボー・ネットワーク, 性と人権ネットワーク ESTO (秋田県), 一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会 (北東北支部, 東京支部, 東海支部, 関西支部, 中国支部, 九州支部, 沖縄支部, 特定非営利活動法人 GIDmedia (東京都), 特定非営利活動法人 LGBT の家族と友人をつなぐ会 (東京都), 特定非営利活動法人 ReBit (東京都), トランス☆プロジェクト (東京都), FTM マガジン laph, SDG にいがた, レインボー金沢, まんまるの会, トランスジェンダー生徒交流会, 特定非営利活動法人 Japan GID Friends (大阪府), G-FRONT 関西 (大阪府), れいんぼー神戸, SAG 徳島, 黒船 CREW GID 長崎, そのほか匿名希望 7 団体。

主要な引用文献と本論文を構成する研究成果

- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ——青年期と危機—— 金沢文庫)
- 日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会 (2012). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン (第 4 版). 精神神経学雑誌, **114**, 1250-1266.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, **15**, 251-265.
- 西野明樹 (2008). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方——FTM 及びその周辺群への心理的援助に関する一考察—— 埼玉大学教育学部学位論文 (未公刊). [第 3 章]
- 西野明樹 (2011). 性同一性障害を自認する当事者の性別移行のなかにみる社会適応再構築プロセス——FTM への半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, **14**, 166-189. [第 4 章]
- 西野明樹 (2013). 未身体的治療での社会的性別移行過程初期における“カミングアウト”とその意味——性別違和を有する者 13 名の語りをもとにしたプロセス理論の生成—— GID (性同一性障害) 学会雑誌, **6**, 43-54. [第 6 章]
- 西野明樹 (2014). 性別違和を有する者の性別移行過程に見られる心理社会的アイデンティティ再構築プロセス——MTF を自認する当事者 16 名との半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, **17**, 199-218. [第 5 章]
- 西野明樹・沢崎達夫 (2013). アイデンティティの本質をめぐる研究の動向と課題——性同一性障害の性別移行を観点として—— 目白大学心理学研究, **9**, 129-141. [第 1 章]
- 西野明樹・沢崎達夫 (2014). 性別違和を有する者の性別移行と心理的成長に関する研究, 目白大学心理学研究, **11**, 55-71. [第 7 章]
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- World Health Organization (2001). *International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF)* (<http://www.who.int/classifications/icf/en/>) (29 March 2010)

審査結果の要旨

1. 論文の批評

性自認と一致しない自らの生物学的性(身体的性別)に違和感を持つ人々の性別違和感を軽減させる手段として性別移行があるが、その最中には多くの心理社会的葛藤が体験される。本論文は、こうした性別移行に関わる心理社会的苦悩と心理的成長に関する研究成果をまとめたものである。

本論文はこの領域に関わる膨大な社会的、医学的、心理学的な文献を概観し、こうした者たちへの心理社会的援助に有意義な知見を提供するものが少ないことを明らかにした上で、当事者たちへの半構造化面接から得られた知見を検討した質的研究、また、その質的研究から得られた知見を当事者への質問紙調査による量的研究によって実証するという大がかりな研究内容となっている。質的研究では性別移行の過程で起きる心理社会的葛藤の様相の変化を明らかにし、量的研究では自我アイデンティティの獲得の重要性を明らかにした点で、本研究の意義は大きい。

結論としては社会に根強い性別二元論に囚われない自分独自のあり方を模索していくことが重要であるとされる。質的研究における概念形成の主観的な部分の適格性の検討、量的研究と質的研究との関連をさらに追求すること等が必要であると考えられるが、心理社会的な支援を行っていく時の基本的な考え方を提示したことは大きく評価されるべきであろう。

2. 審査結果

以上を総合して、博士(心理学)の学位を与えるに値する論文として、「合格」と判定する。本研究は、性別違和を有するものを対象とした質的、量的研究ということで大変貴重なものであり、そのオリジナリティは高い評価に値すると考えられる。今後はさらに質的研究の知見を発展させ、量的にもどこまで実証できるかが課題であり、また、彼らへの心理社会的支援に資するものとなるための具体的支援のあり方を視野に入れた研究を期待したいところである。

最終試験結果の要旨

1. 試験結果

学位請求論文の審査において、全員一致で合格とする結果を得たことを踏まえ、平成 27 年 1 月 21 日の 10 時 40 分から最終試験を兼ねて公開発表会を開催した。目白大学心理学研究科の関係教員と学生を中心に、約 20 名の参加者を前に論文の口頭発表が行われた。

パワーポイントにより作成した資料を液晶プロジェクターで提示し、約 30 分間の口頭発表が行われた。その後、約 20 分間の質疑応答が行われ、研究の背景と位置づけ、概念定義の背景、分析方法の正当性の吟味、総合考察の深まり、臨床的応用の可能性などの観点から質疑応答が行われた。発表者からの十分な説明により、内容に対する批判は少なく、質疑は主に内容に対する再説明および補足が主であった。

先に論文審査において指摘された本研究の目的の明確化と総合考察の展開については、発表会においても取り上げられ、本人から適切な説明が行われた。

以上の公開発表会の意見を参考に、審査委員会において学位請求論文の水準と質疑応答の的確性について審査した結果、最終試験を「合格」と判定することとした。

2. 最終結論

学位論文審査と最終試験の結果に基づき、最終結論として、博士(心理学)の学位授与に値するものとして、「合格」と判定する。